令和３年度　南中学校　校内研究

１　研究主題（継続）

自ら気づき、考え、互いに認め合いながら、学び合える生徒の育成

～ICT 機器等を活用した授業実践を通して～

主題設定の理由

昨年度まで本校は学習指導要領の完全実施に向け、学力向上のための授業改善を研究の中心に据えてきた。JRC の態度目標「気づき、考え、実行する」を踏まえ、生徒の次への意欲を高めるための「認め合い」、学力向上を図るための「教え合い、学び合い」のできる生徒の育成は、研究として一定の成果を挙げている。

今、世界は急速に ICT が進展し、また、グローバル化が進んでいる。生徒たちには自ら課題を探究し、柔軟に解決できる問題解決力や情報活用能力、多様な文化や価値観を受容し他者と協調、協働できるコミュニケーション能力、新たな価値を創造する能力等が求められている。Society 5.0 時代を生きる生徒たちにとって、教育における ICT を基盤とした先端技術の活用は必須である。また、2019 年、文部科学省から打ち出された「GIGA スクール構想」は、新型コロナウイルス感染拡大に伴い早期実現され、生徒向け学習用端末は今年度から導入される。

これからの時代を生きる生徒たちの資質・能力を効果的に育むため、教員も ICT の積極的な活用をはじめとする指導方法や指導体制の工夫改善による協働型・双方向型の授業を実施し、ICT の活用等による新たな学びを推進していかなければならない。以上のことから、本研究主題を設定した。

２　研究仮説（継続）

授業の中に「南中としての学び合いの姿」を意識した「学び合いの場」を設け、ICT 機器等を活用することによって、生徒の知識や理解が深まるだろう。

・以下の①～⑦の手立てを入れた授業を通して。

研究仮説を「やまなしスタンダード」と「甲府スタイル」の視点を参考に具体的に例示した手立てを以下のように示す。（H29 年度に研究仮説としていたものである。）

① 「めあて」の掲示をすることで、
　生徒が本時の学習内容を知り、「見通し」をもちやすくなる。

② 身近な題材や生徒の興味関心を引くような課題設定、課題解決的なテーマ（動き出したくなる課題）を工夫することで、
　生徒が進んで課題に取り組もうとする姿勢が生まれる。
　（課題解決的なテーマとは？＝「なぜ、どうして･･･だろうか？」）

③ 教材・教具の工夫をすることで、
　生徒の思考を助け、理解の促進（深い学び）への入口となる。

④ グループ学習を取り入れることで、
　生徒同士の意見交換を行ったり、教え教わり合ったりすることを通して、生徒の思考が深まる。

⑤ 個で考える時間や全体で話を聞く時間を、グループ学習の時間と意識的に使い分けることで、
　グループ学習が更に効果的に行われ、この定着の手助けとなる。

⑥　「振り返り」の時間を確保することによって、また、いつ「振り返り」をさせるのか（1時間毎か、課題や単元毎か、またはその両方か等）工夫することで、
生徒の学習内容の定着を助けることができる。

⑦　「振り返り」の内容を工夫することで、
学習内容のポイントを絞って生徒に再認識させることができる。

【南中としての「学び合い」の姿】
〇自分の考えを持つ。
〇自分の考えを述べ、他の考えを聞く。
〇他の考えを聞いて、自分の考えと比較する。
〇自分の考えを再考し、他と共有する。

上記①から⑦の授業の手立てにおいてICT活用の検討

3　研究の方向性

1）研究の柱

「教科研究」を中心に、ICT 機器等を活用した授業づくりを行う。

2）研究組織

「学年グループ」を中心に行う。

・校内研の中で教科ごとの交流の場も設定するが、普段から積極的に交流を行う。
・教科ごとの交流は、月に一度それぞれ日を設定し、交流する機会をもつ。交流した内容は記録として入力する。※教科が１人の場合は、個人研究とし、甲教協等の場を利用して交流を図る。
・授業参観は必ず２回以上参観する。研究授業以外に、一人一実践の授業や普段の授業を積極的に見合う。（交流数は研究の達成を図る年度末のアンケートで例年通りの形で問う）。
・見たら、見せてもらった人と見た人が、口頭や簡単なメモで交流を行う。

3）研究の方法

・ICT 機器等を活用し、生徒の学びをさらに深める授業を行う。
・ICT に関する教員アンケートを実施し、研究を通しての変容を見取る。（５月、１２月）
・研究授業は学年１本行う（一人一実践の授業として扱う）。
・指導案検討は学年＋学年以外（教務・特支）で行うとともに、ICT 機器等を活用した授業づくりの意見交換を行う。
・授業参観は他学年の授業を参観し、参観した学年の分析を行う。
・参観した学年の授業とその分析を全体会で共有する。
※研究授業は特設６時間目を設定し、３本一斉に行う。授業後、分科会で分析し、全体会で共有する。
・各学年の生徒実態（アンケート結果：学齢や学年集団によって異なる課題）に基づき、学校全体で設定した仮設を基に具体的な手立てを研究・検証し、確かな学力向上のための授業改善を図る。

4）学習会の実施

ICT 機器等を活用した授業づくり学習会（特にタブレット PC を用いたもの）
※指導主事を招聘し、６月の校内研で実施する。

４　研究計画

＜はじめの確認　Plan＞

４月（校内研なし）

５月１２日（水）第１回校内研究会

全体会　・本年度研究の確認

・指導案（教科）の形式の提案

・生徒実態把握アンケートについて（授業）

・ICT に関する教員アンケート依頼

※生徒授業アンケート実施（５月３１日（月）～６月４日（金））

６月３０日（水）第２回校内研究会

全体会　・ICT 機器等を活用した授業づくり学習会　**※指導主事招聘**

＜実践研究　Do＞

７月（校内研なし）

・教科研究授業指導案（導入・発問・終末）や学習プリント・プレ計画検討

・一人一実践授業指導案検討

８月２３日（月）第３回校内研究会

①全体会　・教育課程説明会還流報告（総・道・特活）

・教育課程説明会還流報告（各教科）及び ICT 機器等の活用交流

②学年部会　・指導案についての交流

８月２４日（火）AM　・各教科における ICT 機器等の活用交流

９月（校内研なし）

・教科研究授業に向けて各学年で準備、一人一実践授業の準備・実施

１０月２０日（水）第４回校内研究会（教科研究授業・研究会）

・授業参観学年の決定、事後研究会について（事前確認：共通の見取りの視点）

・一人一実践授業の準備・実施

＜研究のまとめ　Check＞

１１月（校内研なし）　・教科研究授業のまとめ・入力、一人一実践授業の準備・実施

１２月３日（金）第５回校内研究会

①全体会　・ICT 機器等の活用した授業実践交流

②教科部会　・各教科における ICT 機器等の活用交流

※生徒授業アンケート（１２月６日（月）～１２月１０日（金））実施・入力

※教員アンケートの実施と１月７日（金）までの入力

１月２６日（水）第６回校内研究会

①全体会　・教員アンケート、生徒授業アンケートの分析結果報告

②学年部会　・ICT 機器等の活用交流

＜成果と課題の把握、来年へ　Act＞

２月２８日（月）第７回校内研究会

全体会　・来年度の方向性提案・検討

３月１８日（金）職員会議内（第８回校内研究会）

・来年度の方向性（仮）報告

令和３年度　甲府市立南中学校　**校内研究 全体構造図**

〈学校教育目標〉　心豊かで、主体的に行動できる生徒の育成

〈重点目標〉　確かな学力の向上　豊かな社会性の育成

〈めざす生徒像〉
○自ら学び努力する生徒
○礼儀正しく思いやりのある生徒
○心身共に健康で、たくましい生徒

指導重点　（学校経営方針より）

主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善による確かな学力の向上
- ○基礎・基本の定着と学ぶことの楽しさが実感できる授業づくりに努める。
- ○思考力・表現力を高めるために、生徒が自らの考えを記述する場を設定した授業づくりに努める。
- ○「見通しと振り返り」「自力解決」「学び合い」等の甲府スタイルの授業を行う。
- ○生徒一人ひとりの良いところを見つけ、個を活かす学習過程の構築に努める。
- ○自主学習ノートの取組等を通して、家庭学習の充実と学習習慣の確立に努める。
- ○学力・学習状況を全教職員で把握し、学力向上のための授業改善に努める。

自己実現を図る力と思い遣る心を育む生徒支援による豊かな社会性の育成
- ○「特別の教科　道徳」の趣旨を踏まえた授業づくりに努める。

〈生徒の実態〉

【知識・理解】
- ・知識・理解は平均すると標準レベルである。
  しかし・・・個人差が大きい。
- ・知識が相互に繋がっていない。単発の知識である。　関連づけて考えられない。
  つまり、本当の定着ができているわけではない。

【読み・書き・話す】
- ・文章を読み取る力が弱い。
  つまり、本質を読み取ることが苦手である。
- ・説明する力が弱い。
  言葉による説明、文章による説明が苦手である。

効果的な働きかけ
〈家庭学習〉　〈小中連携〉

効果的な働きかけ
〈ICT 機器等の活用〉　〈授業実践〉

〈研究主題〉 **自ら気づき、考え、互いに認め合いながら、学び合える生徒の育成**
～ ICT 機器等を活用した授業実践を通して ～

「山梨スタンダード」「甲府スタイル」の授業を意識

〈研究仮説〉

授業の中に「南中としての学び合いの姿」を意識した「学び合いの場」を設け、ICT 機器等を活用することによって、生徒自身の知識や理解が深まるだろう。
・以下の①～⑦の手立てを入れた授業を通して。

① 「めあて」の提示をすることで、 生徒が本時の学習内容を知り、「見通し」を持ちやすくなる。
② 身近な題材や生徒の興味関心を引くような課題設定、課題解決的なテーマ（動き出したくなるような課題）を工夫することで、生徒が進んで課題に取り組もうとする姿勢が生まれる。
③ 教材・教具の工夫をすることで、生徒の思考を助け、理解の促進（深い学び）への入り口となる。
④ グループ学習を取り入れることで、生徒同士の意見交換を行ったり、教え教わり合ったりすることで、生徒の思考が深まる。
⑤ 個で考える時間や全体で話を聞く時間を、グループ学習の時間と効果的に使い分けることで、グループ学習が更に効果的に行われ、個の定着の手助けとなる。
⑥ 「振り返り」の時間を確保することによって、また、いつ「振り返り」をさせるのか（１時間毎か、課題や単元毎か、またはその両方か等）工夫することで、 生徒の学習内容の定着を助けることができる。
⑦ 「振り返り」の内容を工夫することで、学習内容のポイントを絞って、生徒に再認識させることができる。

【南中としての「学び合い」の姿】
○自分の考えを持つ。
○自分の考えを述べ、他の考えを聞く。
○他の考えを聞いて、自分の考えと比較する。
○自分の考えを再考し、他と共有する。

〈推進組織〉
- ・「教科研究」　ICT 機器等を活用した授業づくり
- ・一人一実践授業の相互参観による実践交流